

マタイ受難曲の音楽的構造(第3回)

(第21号より続く)

さて、8月27日の練習で安藤先生が「マタイ受難曲をオペラの形で上演した例がある」とおっしゃっていましたが、そのお言葉にヒントを得て、今回は以上(前号)のように分割した場面を、オペラの台本風に何幕何場という呼び方をして、各場面の物語がどのような場所で展開されているのかをまとめてみることにしました。福音書の記述その他の資料に従えば、以下のような場になるかと思えます。また場所と合わせて登場人物(特に合唱部分)もリストアップしました。これで受難物語がよりイメージしやすくなると思えます。

第一幕(第一部)

- 第1場 「十字架上の死の予告と祭司長らの謀議」 オリーブ山とユダヤ教の大祭司カイアフアの館
登場人物： イエス(バス)、祭司長・長老たち(二重合唱 4b: Ja nicht auf das Fest)
- 第2場 「ベタニアの女による塗油」 ベタニア村(オリーブ山の南東麓にある)のハンセン病人シモンの家
イエス、イエスの弟子たち(合唱 4d: Wozu dienet dieser Unrat)
- 第3場 「ユダの裏切り」 祭司長・長老らが集まっている場所(カイアフア邸?)
ユダ(バス)
- 第4場 「最後の晚餐」 イエスの知人の家(場所不明、次ページの地図ではカイアフア邸の裏手と推定)
イエス、イエスの弟子たち(合唱 9b: Wo willst du, dass 9e Herr, bin ichs?)
- 第5場 「オリーブ山にて」 オリーブ山(エルサレム旧市街の東側にある小高い山)
イエス、ペトロ(バス)
- 第6場 「ゲッセマネの祈り」 ゲッセマネ(「オリーブの搾油場」の意味)の園(オリーブ山の南西麓にある)
イエス
- 第7場 「イエスの捕縛」 ゲッセマネの園(キドロンの小川を渡った所にある園(注1))
イエス、ユダ

第二幕(第二部)

- 第1場 「大祭司の尋問」 カイアフア邸
イエス、大祭司(バス)、証人(バス×2)、群衆(二重合唱 36b: Er ist des 36d: Weissage)
- 第2場 「ペトロの否認」 カイアフア邸の中庭
ペトロ、召使の女性たち(ソプラノ、アルト)、居合わせた人々(合唱 38b: Wahrlich, du bist)
- 第3場 「ユダの最期」 祭司長・長老たちの集まる場所
ユダ、祭司長・長老たち(二重合唱 41b: Was gehet uns)
- 第4場 「総督ピラトの審問と磔刑判決」 総督の官邸とその周囲(注2)
イエス、ピラト(バス)、ピラトの妻(ソプラノ)、群衆(合唱 45a: Barrabam 45b/50b: Lass ihn kreuzigen 50d: Sein Blut komme über uns und unsre Kinder)
- 第5場 「鞭打ち」 総督の官邸とその周囲
ローマの兵士たち(二重合唱 53b: Gegrüßet seist du)
- 第6場 「十字架の道行き」 官邸からゴルゴタの丘へ

第7場「十字架上のイエス」 ゴルゴタの丘(所在地は諸説あるが、下記の地図では現在聖墳墓教会のある場所)

通行人(二重合唱 58b: Der du den Tempel)、聖職者たち(二重合唱 58d: Andern hat er)

第8場「イエスの死」 ゴルゴタの丘

イエス、居合わせた人々(合唱 61b: Der rufet dem Elias 61d: Halt! Lass sehen)、百人隊長と兵士たち(合唱 63b: Wahrlich dieser ist Gottes Sohn gewesen)

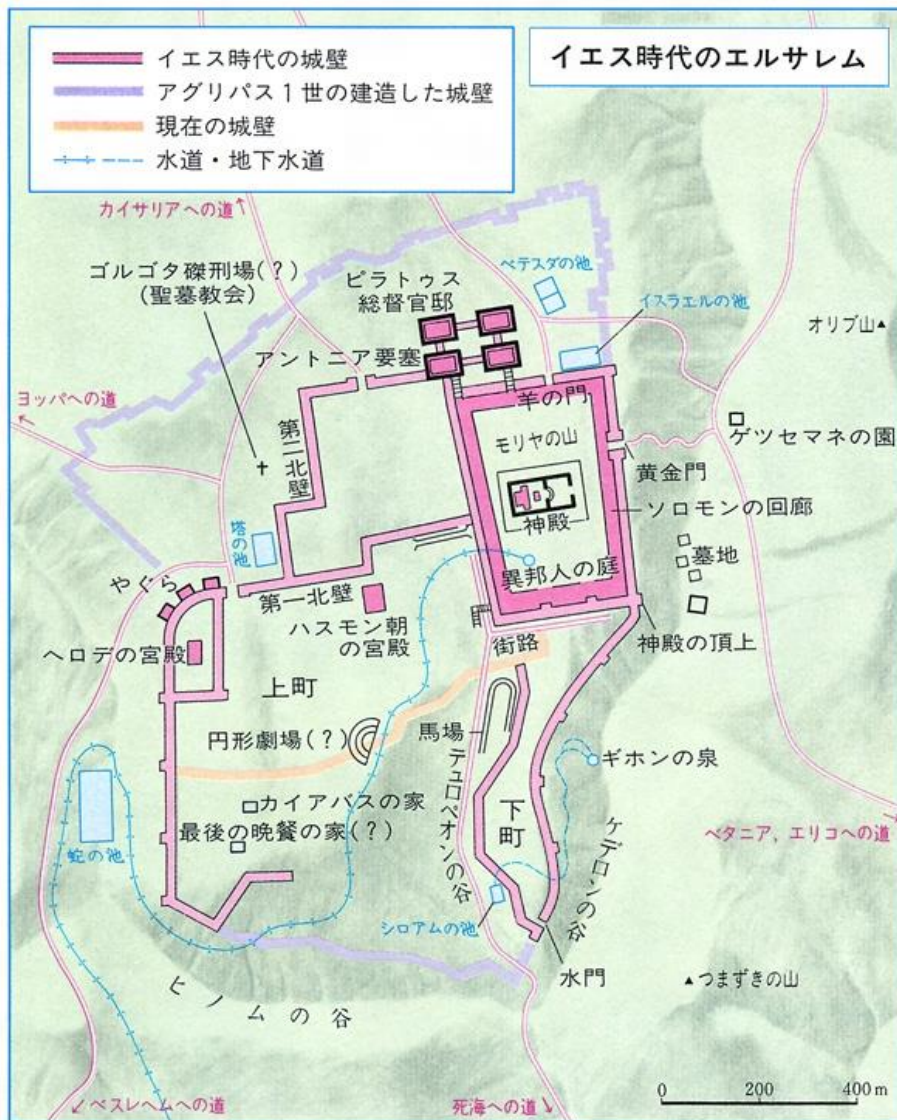
第9場「降架と埋葬」 ゴルゴタの丘と墓地(「園の墓(注3)」)

ピラト、聖職者たち(二重合唱 66b Herr, wir haben gedacht)

(注1,3) ヨハネ福音書の記述による。(注2) ヨハネ福音書に「彼ら(群衆)は自分では官邸に入らなかった」とある。

演奏の際にこれらの場所の位置関係や環境を意識しておくことは、安藤先生のおっしゃる「この場面で語っているのは誰か、そしてその人数は?とを考えながら歌う事」と同様の意味があると思います。

より具体的なイメージをお持ちいただくため、イエスが活動していた時代のエルサレムとその周辺の地図をご覧に入れますが、最後の晚餐を行った家やゴルゴタの丘の位置ははまだ確定していないようです。



ウェブサイト「コトバンク」より転載。出典は「ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典」(発行元ブリタニカ・ジャパン)

【後記】 今回は安藤先生のお言葉に触発されて、受難劇の舞台となった場所と登場人物に着目してみました。本号を執筆しながら、マタイ受難曲の舞台形式上演を収録したブルーレイディスクを山田様からお借りして鑑賞しましたが、衣装・舞台装置なしに、歌い手の立ち位置と所作で音楽と受難劇の関係性を示して興味が尽きません。(新井)